哲學研究　第三十一號　第三卷第十冊

デカートの「規則論」に現はれたる批判論的思想

朝永三十郎

一

晩近に於ける新カント運動の勃興に伴つて先行哲學の見方や解釋もおのづから其影響を受け、從來看過されて居たカント哲學と密接な關係を有する其の諸樣相が漸次注意を惹くやうになり、其れとカント哲學との類緣が次第に重視さるゝやうになつて來た。例へば、形而上學的に見られて居たプラトーンの「イデア」界を論理的に見るやうになり、ロッツェの提說に從つて之を「妥當」の世界となすに至つたこと(一)や、形而上學を中心として見られて居たライプニッツ哲學をば認識論的又は論理的に轉釋し、其出發點幷に中心點をば眞理問題、認識問題にあるとするやうになつたこと(二)などは其

の最著しい例であらうが、更にデカート哲學に於ける批判論的樣相を重視して之をば普通の史家の見る以上にカント哲學と接近せしめんとする企圖がある。而して此方向に向つてのライプニッツ研究に於て從來「モナドロジー」が基點又は中心とされたに反して從來閑却されて居た他の小著、小論文、往復書翰等が重要視せらるゝに至つた(三)と同樣、此方向に向つてのデカート研究に於ても「方法叙說」(Discours de la Méthode)「瞑想錄」「哲學原理」等の主著が中心とされずして、デカートの最初の哲學的著作と見らるべき、未完斷片の遺稿である「規則論」Regulae ad Directionem Ingenii(詳しくは「精神指導の規則」普通,,Regulae,",,Regeln,",,Rules"等の標題で通用して居るから此處でも「規則論」と略譯して置く)が重要視せられて居る。

尙ほ此方向に向つての先行哲學の闡明に於ては新カント派中常にマールブルク派の學者が中心、少くとも其重要なものゝ一となつて居る。現代に於てプラトーンの新解釋の代表者はコーエン(これは最近に物故して嚴密に言へば現代に屬しないと言はねばならぬけれども)及びナトルプであり、ライプニッツの新解釋の最重要な代表者としてカッシーラーが擧げられ、此の方向に向つてのデカート研究の最重要なる代表者も亦ナトルプである。ナトルプの此方向に向つてのデカート研究にはデ

カートの認識論。批判論の前史に關する一研究」(Descartes' Erkenntnistheorie. Eine Studie zur Vorgeschichte des Kriticismus. 1882.)があるといふが、今は不幸にして之を參考する便を有しない。此一編は、ナトルプの『「規則論」より「瞑想錄」までのデカートの發展』(Die Entwicklung Descartes' von den „Regeln" bis zu den „Meditationen." Archiv für Geschichte der Philosophie, Bd. X., S. 10—28)と「哲學文庫」中のデカート哲學書全集中に於ける其編者アルトゥール・ブッヘナウのデカートに關する種々の研究、注意(ナトルプに似た見方をして居る)より得た明示、暗示を緒として「規則論」を讀んで得た結果である。

(一) 本誌第十八號「ロッツェ妥當說の由來」(錦田義富)、同第十四號「ヘルマン・ロッツェ」(朝永三十郎)參照。

(二) 本誌第二十號「最近のライプニッツ研究に就いて」(錦田義富)、同二十五、二十七號「ロッツェ妥當說の由來」(錦田義富)參照。

(三) 同上。

二

「規則論」の成立に就ては種々の異說があるが、併し今は深く此問題に立入らない、又た立入る必要もない。何故かなれば、吾々の當面の目的に對しては其れが「方法叙說」、「瞑想錄」、「哲學原理」等のデカートの主著に先つて書かれ、デカートの最初期の哲學的著

作である(哲學的以外には此以前にも若干の論著がある、今日に存する「音樂撮要」Compe-ndium Musicae の如き其一である)といふことが確定して居れば充分である。而して此點に於ては最古く對立した兩異說であるベイエー及びミレーを初めとして其後の研究者も殆んど皆な一致して居る。(一) 唯吾々は後の叙說に對する必要上、單に下のこと丈けを(證據調べは省略して)述べてデカートの思想發展上に於ける此著作の位置を示すに止めて置きたい。

デカートが其軍旅生活の間一六一九年ノイブルクの冬陣に於て彼れの所謂「奇しき發見」inventum murabile をなしたといふことは廣く知られて居る事實であるが、此「奇しき發見」こそ彼れが其の發展と適用との爲めに其生涯を獻げんした「規則論」に於て彼れが「所謂普通的科學」universalis sapientia, mathesis universalis の落想であつた。デカートは代數に依て幾何問題を解くことを案出して解析幾何學の基礎を置いた、又た自然界の一切の變化をば平等なる物質の機械的運動と考ふることに依て之を數學的證明に服從せしむることを得ると考へ、之に依て「ルネッサンス」以來多くの思想家が憧がれ求めた一切の自然界の秘密を闡くべき關鍵を發見したと考へたが、彼は是等の發見と密接に關聯して數學的認識をば一切の認識の典型と考ふるに至つた。其の

確實性の標準、其の明晰判明の直觀、其の解析的方法をば彼れは一切の認識に適用して之に依て全然新しい基礎を哲學、或は廣く一切の科學に與へやうと考へた。此落想が卽ち彼れの所謂「奇しき發見」であつた。間もなく彼れは軍隊生活を辭して約五年間を諸方の遍歷に、次の約三年間を巴里及び其近郊の隱棲に送つたが、此間に(恐く隱遁生活の裡に)彼れは其普遍的科學の落想を詳叙して其方法論の梗概を草せんとした。其れが未完の儘筐底に藏せられて居たのが卽ち「規則論」であつて、「方法叙說」は其れが更に整理精錬され、重複が淘汰されて簡潔にされ(且つ先行哲學者の著作より受けた先入の見に累はされて居ない普通人士の單純自然の理性に訴へんが爲めに殊更に佛語を以て書かれ)たものであるのみならず、其內容に於ても兩者の間に重要な相違がある。而して「方法叙說」に添付して「哲學論文」Essais philosophiques の標題を以て彼れが公にした「光學」「氣象學」「幾何學」の三編は自己の提唱に係る此新方法をば實地に——物理學及び幾何學の研究に——適用して其適用の實例と效果とを示すと共に、科學史に於ける彼れの重要なる貢獻たる數學的物理學及び解析幾何學の二學を創說したものであり、而して同時に更に此方法をば形而上的對象及び廣く自然界の研究に適用して其獨創の形而上學說と徹底した機械的世界觀とを說いた「瞑想錄」

及び「哲學原理」の先驅と見らるべきものである。之に依て見れば「規則論」は大體デカルト哲學體系の序論たるべき「方法叙說」の未熟の形であると見られねばならず、從つて又たデカルトの哲學思想に於て最幼稚なる發展階級を代表すると見られねばならぬ(年齡より言ても其れはデカルトの二十三歲より三十二歲までの間の作と見られねばならぬ)。併し批判哲學との關係といふ點より見れば此作はデカルトの諸作中最重要なものであつて、之に現はれて居るデカルトの立場は批判論の種々の重要な樣相を具備して居る、少くともカント前の近世哲學者の如何なる他の著作よりも、更にデカルト自身の後期の何れの作よりも、遙かに批判的要素に富んで居る。(二)

(一) Kuno Fischer, Geschichte der neueren Philosophie I, S.181ff.; Descartes' Philosophische Werke I (Phil. Bibliothek Bd. 26 a)S. V—XII Artur Buchenaus Vorrede zu den „Regeln".

(二) クーノー・ヴィッシャーは一方に於ては「規則論」を重視し、之と「方法叙說」との間の重要なる相違を看過してデカルトの方法觀の叙說に於ては主として之に據つて居るが、他方に於ては「規則論」に於ける批判論的契機の見方は不充分である。「規則論」の「方法」と「方法叙說」の「方法」との間には重要な相違があり、而してデカルトの哲學體系の基礎となつて居るのは後者であるから、前者と後者とを同視するといふことも、又た前者を主材とした叙說をデカルト哲學體系の基礎とすることも共に不精密の謗を脫かれない。又た彼れは、此叙說の間に批判哲學との重要なる類緣の一二點に觸れては居るが、併し尙ほ他の重要な點を遺

して居る。詰り「規則論」は、デカートの體系の基礎となつて居る「方法叙說」の方法論をば完成したものとして見ればデカートの思想の極めて未熟な幼稚な段階を代表すると見ればならぬと共に、批判哲學の萠芽を含むといふ點より言へば他の何れの作にも優ると見ねばならぬ。

三

此書の劈頭、卽ち「規則第一」の條下に於てデカートが第一に力說して居ることは、一切の科學 Scientiae は吾々の思惟の本性に根柢を有する「方法」の統一作用に基いて成立つものであるから、此方法、此思惟の本性の認識が自餘一切の認識に先つて爲されねばならぬ最初の事業であるといふことである。

科學は全然精神の認識 animi cognitio より成立つ」(S.3)(1)「一切の科學は人智 humana sapientia に外ならず」、而して人智は「其れが如何に多樣な對象に適用さるゝとも常に一にして同じもの una et eadem である、大陽の光が其れに照される事物の多樣に依て變化を受けぬと同樣對象の多樣に依て變化を受けぬ」(S.3)。從つて科學の研究者は第一に先づ特殊枝葉の研究に向はずして一切の科學の本源たる此人間精神又は人智其者の本性を究めねばならぬ。此本源の研究は卽ち特殊の研究に對して「普遍的科學」univ-

ersa Sapientia と呼ばるべきものであつて、而して一切の特殊認識は其れが人間の認識である以上、各自此「普遍的科學」に依て統一さるゝのみならず、其凡てが又た之に依て互に密接に結付けられ、互に依存する樣に相關聯しなければならぬ、從つて個々の特殊認識をば個別に研究するよりも一切の認識をば互に關聯せしめて研究する方が遙か容易でなければならぬ。從來の學問研究者の多くが、植物の性能や、天體の運行や、鑛物の變質といふが如き枝葉の問題に沒頭して人間の精神其者、或は此「普遍的科學」其者の研究に何等の注意をも向けなかつたのは本末輕重を轉倒したものと言はねばならぬ(S.4)。

即ち「規則論」の發端に於て既に、第一に認識其者の研究をば哲學の首途に置くといふこと、第二に物の統一の代りに認識の統一を置代へるといふこと、此二樣の批判論的思想が鮮かに現はれて居る。此第二の點は其後隨處に反復注意されて居る。デカートは事物を認識するには之を分解して單複の順序に排序せねばならぬとしたが、併し其れはアリストテレース一派の範疇に於て見る樣な存在の仕方に從つてゞなくして、「一に依て他が理解され得る限りに於て」なされねばならぬ(S.25)と說き、又た認識の限界を論ずる爲に認識の對象をば單複の二種に分類するに當て、特に單に吾

吾の知性が所理し得る限りに於て之を考査する」と斷り(S.42)更に認識對象の考査に當ての第一の注意として「物は吾々の認識の順序に從へば吾々が事實的存在に關して之に就て云々する場合とは全く異なつて考へられねばならぬ」(S.61)と說いて居る。

斯くて認識は對象を照すところの大陽であつて對象よりして光を受けるものではない、認識が對象に順應するのでなくして對象が其れが認識の對象である限り認識に順應するのである、認識は其自身の內に一切の科學、一切の知識の統一及び同一の原理を具有し、之に依て普ねく一切の事物を結合統一して一の普遍的認識の對象とする。併し此統一を造出し此を一切の事物に與ふるところのものは認識の如何なる力なるか。曰く「方法」の力である。此「方法」が如何なるものであるかはデカートに依れば無論從來の多數學者の本末顚倒の結果として尙ほ闡明されて居ない、之れを闡明することは彼自身の第一義的任務として殘されて居るとするのであるが、併し其本性は古來事實として存する數學と或先覺思想家の思索の跡とに於て或程度までは暗示されて居る。デカートは彼自身如何にして此暗示を受けたかをば「規則第四」の條(S. 15 22)下に叙述して居るが其叙述は大部分「方法叙說」の其れと附合して居るけれども、其間に觀念論的傾向、批判的傾向が後者に比して遙か强く現はれて居る

ことが注意を惹く。

（一）書名を示さるゝ頁付けは凡てArtur Buchenauの獨譯Regeln zur Leitung des Geistes (Phil. Bibliothek Bd. 26. Descartes' phil. Werke I.)による。但し引用句中の原語は多く予の挿入に係る。

四

デカートは先づ從來事實として存する諸學中に於て數學が最確實の學であるといふことに着眼した。而して先づ「數學的」なる語は精密に何を意味するか、何故に人は從來算術及び幾何の二學のみを數學と呼び、天文、音樂、其他の學をば其内に數へぬかを問ふた。而て秩序及び計度Mensuraに關する研究を目的とする一切の科學は其れ丈けの程度に於て必ず數學に關係を有する、その秩序及び計度の研究さるゝ對象が數なるか、形なるか、天體なるか、光なるかには關係しない、といふことを見出した。而して之より推して、如何なる對象に適用さるゝかといふことを全然離れて、苟くも秩序及び計度に就て知らるべき一切のことを說明し得べき普遍的科學がなければならぬ、而して此學は、其れあるが爲めに他の科學が數學的と呼ばれ得る所以の根據を含まねばならぬから、之を「普遍的數學」と呼ぶことが出來ると考へた。（一）

人間精神は或「神的」な性能を具有して居て眞知の種子は本來其中に植付けられて居るから、全然放置されて居ても或は本末顚倒の樣々の學問の障害を受けつゝも、尙ほおのづから芽を萠き何等かの結實を齎らさずには居ない。過去に於ける其成果の實例は卽ち算術及び幾何學である。希臘の數學者中に旣に解析に依て幾何問題を解くことは知られて居つた。而して古代數學者が形に就て行つたことを數に就て行ふやうになつたのが今日の代數である。此兩學は實に此「方法の生具的原理より生じ出でたおのづからの結實」(S.17)に外ならぬ。此二學は其の對象が非常に單純であるから、複雜なる對象を取扱ふ他の諸學に比して研究上障碍が少ない、此生具的原理の適用が此二學に於て特によく發達したのは其の自然の結果であると言はねばならぬ。併し他の諸學と雖も若し綿密なる注意と努力とを以て考究したならば充分なる成果が得られない理はない。原理上の可能不可能の差でなくして對象の單複に基く唯の難易の差である以上、其困難は又た考究の綿密に依て打勝たるべきものでなければならぬ。

尙ほ又た、希臘の哲學創始者の或者が、數學の造詣なきものの哲學の門に入ることを許さなかつたといふ事實(二)も亦た此の如き思想に勢援するのである。無論彼等は

斯の如き普遍的方法の明確な意識を有つては居なかつた。併し哲學、或はあらゆる學の眞の方法が最單純な形を以て數學に現はれて居ること、從つて先づ此學に於て精神を訓錬した者にして初めて他の更に複雜なる對象の研究に入ることが出來るといふことを、其無垢な書籍や枝葉の研究やに依て原創力の消耗されて居ない心を以て朧ろ氣に洞見したのであると想像することが出來る。

即ち、從來成立して居る數學は吾々が新方法を發見すべき端緒を供給する。數學其者は其れほど重要な學ではないが、吾々は之を通じて一切の科學の基礎たるべき新方法の微光を認めることが出來る。此新科學は實に「人間理性の第一基礎」prima rationis humanae rudimenta (S. 18)「眞理の第一種子」prima veritatum semina(S. 17)を其内に含み、而して「如何なる對象からも眞理を引出す」といふことを其職分とし、「一切の認識の淵源」として一切の科學の首位を占め、「人力によりて獲らるゝあらゆる他の認識に優越する」ものである。(S. 17—18.)

然らば對象の如何に拘らず數學をして確實の認識たらしむる根據は其の如何なる性質であるか。デカートによれば吾々の知性が誤謬の恐なくして進み得る確實なる認識の途に二つある。其れは即ち直觀と演繹とである。但し此處に所謂直觀

とは普通解せらるる樣に感覺の所示を意味するのではない、若くば不明瞭なる感性的想像に基いた判斷でもない、一毫の疑も挿むことの出來ぬ「純粹にして注意したる精神の(mentis pure et attentae)單純判明の表象」である。別語を以て言へば「唯々理性の光明のみより起り來る、一切の疑を超越したる、純粹にして注意したる精神の表象」である。例へば吾々が直觀に依て、自己が存在すること、自己が思惟(意識)すること、三角形は三線に依て、球は唯一の面のみに依て圍まるゝといふやうなことを知るは其數例である。演繹は之に反して既に確實に認識されたる事よりして必然的に其れより起り來ることを導出す作用である。(S. 12—13) 而してデカートに依れば、數學が他の學に優れて確實であるのは此認識の兩途以外に絕對的に如何なる作用にも賴らざる結果である。從つて此數學の研究の仕方をば其特殊の對象より引離して考査すれば、吾々は凡ての科學に適用さるべき方法上の諸規則を發見し得る理である。

以上「規則論」に於ける方法と數學との關係をば殊更に比較的詳述したのであるが、其れが「方法叙說」に於ける其れと如何に異なるかといふこと、而して其變改が「規則論」に於ける批判的思想の變改と如何に關係するかといふ問題は後に讓つて、此處では上述の所說と結付いてカントの「アプリオリ」の觀念が如何に現はれて居るかを見て

置かう。前に吾々は新科學は「人間理性の第一基礎」「眞理の第一種子」を含むといふ句を引用したが、此第一 prima の語は明かにカントの「ア・プリオリ」の意味を含むと見ることが出來やう。更にデカートが方法の根本法則を「最單純にして第一、若し吾々の精神が初よりして之を適用し得るに非ざれば方法の如何なる規定と雖も―如何なる單純なものであつても―解することは出來ぬほど單純にして第一のものであると說いて居る語句中には「ア・プリオリ」の意味が最明瞭に現はれて居る。更に又た眞理の種子、方法の原理は人間精神の「神的」性能中に本來胚胎して居る、數學は實に此生具的原理より生じ出でたおのづからの結果」に外ならぬといふ語句にも同樣の意味を讀むことが出來る。更に「純粹にて注意したる精神の單純判明なる表象」又は「唯々理性の光明のみより起り來る……純粹にして注意したる精神の表象」といふデカートの直觀の定義がカントの「ア・プリオリ」の意味を有することは言ふまでもない。其他デカートは直觀の條件として其言表が明晰判明なること、次ぎ次でなく全體として一度に totâ simul に認めらるゝといふことの二つを(S.51)、或は「現在の明證」praesens evidentia を(S.13)擧げたところにも同樣の意味が現はれて居る。但しカントの思想との間に重要なる精粗の差があるといふことは尙ほ後に述べねばならぬ、尙ほ又た此

等の思想に於ては彼れが古代哲學者中最尊重して居つたプラトーンの影響を受けて居るのであると見らるゝのであるが併し此點に於て彼が批判論を逸脱する端が開けて居ることは後に述べる通りである。

（一）但し此處に所謂「數學」は數を對象とするといふことを離れたものであるから精密に言へば數學と譯するは不可である。

（二）ピタゴラス派及びプラトーン、殊に後者が三八九年「アカデミー」の開講に際して述べた有名な「幾何學を學ばざる者は予の門に入る勿れ」の語を意味すると解せらるゝ。

（三）デカートは規則論に於ても「方法叙說」に於ても數學其者に重きを置いて居ない、規則論に於ては數學の問題をば die töricht en Probleme.... , womit Rechenkünstler order Geometer ihre Mussestunden auszufüllen pflegen と言つて居る。

（四）第一といふ譯語は不精密と思ふが外に適譯を思付かないから其れにした。Buchenauは die wurzelhaften Grundlagen と譯し、Torreyの「デカート抄」には the first elements と譯されて居る。

五

更にデカートは上に叙說して來たことゝ密接に關聯して認識の限界問題が哲學の最根本問題であることを反復して切論した。

前に述べたやうに哲學は認識は何ぞやといふ問題を以て出發せねばならぬ。尙

ほ又た、確實なる認識は明晰判明の直觀と、演繹に依て之よりして必然的に導出さる る等しく明晰判明の結論との外に出でてはならぬ。然るに吾々が認識と稱するものゝ中には斯の如き直觀と演繹とに依るとの出來ぬものがある。斯る場合には吾々は其處に止まつて明晰判明の圈外に認識を進めることを避けねばならぬ。併し斯る經驗と伴つて吾々には、吾々の知性は抑も如何なることを知り得、如何なることを知り得ざるかといふことを一般的に決定せんとする要求がおのづから起らざるを得ない。卽ち認識の本性問題と結付いてその限界問題が起らざるを得ない。

「精神は如何なることを爲し得るかを明知せずして無益の勞力を費やすことを避けんが爲めには吾々は特殊の事物に先つて生涯に一たびは必ず人間理性は一般に如何なる認識を爲し得るかといふ疑問を起さゞるを得ぬ」(S. 40)。「人間認識は如何なるものなるか其圈域は如何といふ問題ほど切要な問題はない、從つて吾々は此双方を一の問題に包括して凡ての他の問題に先つて第一に研究されねばならぬものとする。これ實に聊かなりとも眞理を愛するものが生涯に一たびは必ず究明せざるを得ざる問題である、何となれば此問題の研究に一切の知識の眞の器械、全方法が包含されて居るから。世人の多くは人間理性は果して斯の如きことを爲し得るや否

やを一たびも問ふことなくして自然の秘密、地上の事物に對する天體の影響、未來の宿命といふ樣なことに關して大膽にも論議するが、予を以て見ればこれ程不合理なことはない。」(S.41)斯くてデカートは認識の限界問題を哲學の中心問題としたことを以て史上に代表的位置を占むるロック及びカントに比べて劣らぬ强さを以て、而して殆ど同樣の語氣を以て此問題が一切の問題に先つて解決せられねばならぬものであることを力說して居る。

斯くて「規則論」に於けるデカートの思想には批判哲學の重要なる諸樣相がカント前の近世哲學者の他の著書の何れにも優つて現はれて居る。彼は一方に於ては一切の認識の終局要素たるべき根本概念と其の必然的結合たる根本命題とを發見せんとした點に於てライプニッツを介してカントの第一の先驅となつた。卽ちカントの範疇及び「根本命題」の論究は是等の豫備的試みの最後の結果であると言へる。他方に於ては認識の限界問題を哲學の首途に置いた點に於てロック及びヒュームを介してカントの第一の先驅となつた。若し形而上學を中心として近世第一期の哲學の發展が一先づスピノーザに至て發展の頂點に達したものと考ふれば、其第一の端

を開いたものは「瞑想錄」及び「哲學原理」であると言へるが、併し認識論を中心として見て近世第一期哲學の發展がカントに至て一先づ完成したものと見れば、其第一の發端は「規則論」であつて、ライプニッツ、ロック及びヒュームを通してカントに至て大成したと言はれ得ると思ふ。唯其認識の限界を論ずるロック、及びヒュームの如く精ならず、眞理問題、認識問題の內容に於てライプニッツほど深からざるのみであるが、これはカントを距ること最も遠い近世哲學者の最も初期の最も未熟な哲學的著作として吾々は怨さなければならない。併し「規則論」に現はれた批判論的思想の此幼稚ではあるが有望な萠芽は何故に、著者自身が哲學思想の根本的革新の大抱負を以て世の批評に訴へた後期の主著に於て毫も發展されずに終つたのであらうか。（未完）